

e-dream-s 通信

No. 95 発行：2009年1月18日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

明けましておめでとうございます。新年号は1月4日に行なわれた理事会の様子、CamTESOLカンファレンス・ツアー、そして本格的に始動したカンボジア・プロジェクトについてお届けします。山田理事からはメキシコからのレポートが届いています。どうぞお楽しみください。

目 次

- | | | |
|------------------------------------|--------------|-------|
| 1. 新年を迎えて ～ カンボジア・プロジェクト元年に | 中川 房代 | p. 2 |
| 2. カンボジアで踊る | 辻 莊一 | p. 3 |
| 3. 残り福に考える日本の文化 | 井川 好二 | p. 6 |
| 4. 新しい私へ：CamTESOLカンファレンス・ツアー進捗状況報告 | 塚本 美紀 | p. 11 |
| 5. My Experience in Japan | Sokhom Leang | p. 12 |
| 6. トロバエク・プレイ、サク？ | 仙崎 裕右 | p. 14 |
| 7. <2009年メキシコ便り> メキシコでの異文化 | 山田 昌子 | p. 16 |



1月4日に発足したカンボジア・プロジェクト・チームの中川チーフ（中央）、塚本副チーフ（左）とソコム先生（右）（2009年1月仙崎裕右氏撮影）

新年を迎えて ～ カンボジア・プロジェクト元年に

中 川 房 代

2009 年、明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく申し上げます。

さて、昨日 1 月 17 日は阪神・淡路大震災が起こった日、今年で 14 年が過ぎました。当時は、大阪在住の私も大きな揺れと恐怖を感じ、また神戸に住む夫の両親と連絡が取れなくなり、登山用のリュックに水とカイロ、カップ麺などを詰めて神戸に向かい、瓦礫の中を歩いて両親を捜したこと、そして、神戸の街の惨憺たる状況、1 ヶ月にわたる両親の避難所生活など、悲しくて辛い思いは私にとっても忘れることのできない体験です。同時に、その時の全国各地からの救援活動や支援活動は、日本における市民活動・NPO 活動を語る際に、NPO 活動・NPO 法の原点として忘れることはできません。

その NPO 法は、2008 年 12 月 1 日に施行 10 周年を迎えました。現在、NPO 法人は全国で 35,000 を数え、この 10 年間の日本における市民活動の拡がり、NPO を巡る社会の状況は大きく変化してきました。e-dream-s も、今年 3 月には設立 10 年目に突入します。

そんな 2009 年の幕開けの 4 日、京都で第 30 回理事会を開催しました。来日中のカンボジアのソコム先生も一緒に論議に参加して頂きました。

論議した内容は、

1. CamTESOL2009 ツアーの進捗状況の報告（塚本理事より）
 2. カンボジア・プロジェクト～英語教育奨学金の提案（中川より）
 3. 2008 年度収支決算中間報告（藤本会計担当より）
- です。

1 の CamTESOL の発表の準備は順調に進んでいます。1 月 5 日には、発表者から内容を紹介するプレゼンテーションをして頂きました。それぞれ発表の骨子は決まっており、今後具体的な内容を詰めていく段階にきています。

2 の奨学金プロジェクトは、実施要項を決定していくにあたって、企画立案する機関として「カンボジア・プロジェクト・チーム」を発足させることになりました。発足時メンバーは、中川チーフ、塚本副チーフとソコム先生の 3 名です。今後必要に応じてメンバーを加えていくこととなります。まだ給付対象や金額など検討していかなければいけないことばかりですが、ソコム先生やカンボジアで繋がりのできている人たちを相談しながら、決めていければと思っています。

3 の収支中間報告では、収入、支出ともに昨年度並みが予想されること、課題としては会費未納者に会費を請求できていないことがあげられます。会員リストの整理、e-dream-s の活動を定期的にお知らせすることで、継続して会員になっていただけるようにしていかなければと思っています。

今年 10 年目を迎える e-dream-s は、今後 10 年の活動の 1 つとして、「カンボジア・プロジェクト」を位置づけていきたいと考えています。よりよい国際社会に貢献できる活動を、これからも企画立案していきましょう！

カンボジアで踊る

辻 莊一

この原稿は、いつもと違って紙に印刷されて配布されず、Eメールによる電子配信のみになるはず
です。今回はその条件を利用した内容と形にしよと思います。読者の皆さんもこの原稿は印刷せず
にコンピュータのモニタ上でお読みください。

通常の白黒印刷でなくコンピュータのモニタで読むという
ことは、まずこんな風に文字を緑色にしたり、赤くしたりも
できます。さらにカラー写真もこんな風にきれいなまま見る
ことができますし、またモニタ上で文字の拡大ができるので
最近老眼が進んでいる私の様な人間でも、眼鏡なしでも快適
に原稿を読むことができます。



しかしそれだけではカラー印刷と大して変わらないじゃないかというご批判も頂きそうなので、動
画も利用した原稿にしてみましょう。

さて、上の写真の真ん中で踊っているのは、Matt Harding という人物でネット上では結構な有名人
です。

After high school, Harding, following his dad's advice, decided to skip university, and began his game
industry career working for a video game specialty store. Harding later worked as an editor for GameWeek
Magazine in Wilton, Connecticut, and then as a software developer for Activision in Santa Monica,
California and then Brisbane, Australia.

数年後彼は仕事を辞めて友人と旅にでます。

Harding was known by his friends for a particular dance, and while videotaping each other in Vietnam, his
travel companion suggested he add the dance. The videos were uploaded to his website for friends and family
to enjoy. Later, Harding edited together 15 dance scenes, all with him center frame, with the background
music "Sweet Lullaby (Nature's Dancing 7" Mix)", a 1992 world music song by Deep Forest.

そのビデオがこれです。(2分45秒)

<http://jp.youtube.com/watch?v=7WmMcqp670s>

訪れた国は以下の20カ国

- | | | |
|---------------------------|-----------------------------|---------------------------------|
| 1 Beijing, China. | 8 Angkor Wat, Cambodia | 15 Tsavo, Kenya. |
| 2 Hanoi, Vietnam. | 9 Bengal Jungle, India. | 16 Impenetrable Forest, Uganda. |
| 3 Delhi, India. | 10 Los Angeles, California. | 17 Yangon, Myanmar. |
| 4 Moscow, Russia. | 11 Sükhbaatar, Mongolia. | 18 Westport, Connecticut. |
| 5 Bangkok, Thailand. | 12 Kilimanjaro, Tanzania. | 19 Seattle, Washington. |
| 6 Agra, India. | 13 Siberia, Russia. | 20 New York, New York. |
| 7 Prague, Czech Republic. | 14 Monte Albán, Mexico. | |

このビデオが好評を博し、スポンサーがつきます。

Harding created a second version of the video in 2006, with additional dancing scenes from subsequent travels, called "Dancing 2006". At the request of Stride, a gum brand, he accepted sponsorship of this video, since he usually travels on a limited budget.

そのビデオがこれです。(3分43秒)

http://jp.youtube.com/watch?v=bNF_P281Uu4

訪れた国は以下の36カ国

- | | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1 Salar de Uyuni, Bolivia. | 13 Sossusvlei, Namibia. | 25 Ephesus, Turkey. |
| 2 Petra, Jordan. | 14 Routeburn Valley, New Zealand. | 26 Guam. |
| 3 Machu Picchu, Peru. | 15 Monument Valley, Arizona. | 27 Mokolodi, Botswana. |
| 4 Venice, Italy. | 16 South Shetland Islands. | 28 Berlin, Germany. |
| 5 Tokyo, Japan. | 17 Chuuk, Micronesia. | 29 Sydney, Australia. |
| 6 Galápagos Islands, Ecuador. | 18 London, England. | 30 Dubai, United Arab Emirates. |
| 7 Brisbane, Australia. | 19 Very Large Array, New Mexico. | 31 Rock Islands, Palau. |
| 8 Luang Prabang, Laos. | 20 Abu Simbel, Egypt. | 32 Mulindi, Rwanda. |
| 9 Bandar Seri Begawan, Brunei. | 21 Easter Island, Chile. | 33 Neko Harbour, Antarctica. |
| 10 Area 51, Nevada. | 22 Haute Picardie, France. | 34 Kjeragbolten, Norway. |
| 11 Tikal, Guatemala. | 23 Mutianyu, China. | 35 San Francisco, California. |
| 12 Half Moon Caye, Belize. | 24 New York, New York. | 36 Seattle, Washington. |

このビデオも大変な人気で、さらにもう1本作りました。スポンサーはVISA。

最新バージョン(4分29秒)

<http://jp.youtube.com/watch?v=zlFkdbWwruY&feature=PlayList&p=5712CC5563227DEE&playnext=1&index=21>

訪れた国は以下の70カ国

- | | | |
|--------------------------------------|--------------------------------|------------------------------------|
| 1 Mumbai, India | 16 Buenos Aires, Argentina | 31 Poria, Papua New Guinea |
| 2 Paro, Bhutan | 17 Chakachino, Zambia | 32 Miami, Florida |
| 3 Giant's Causeway, Northern Ireland | 18 Istanbul, Turkey | 33 Munich, Germany |
| 4 Stone Town, Zanzibar | 19 Wainivilase, Fiji | 34 Tongatapu, Tonga |
| 5 Lancelin, Australia | 20 London, England | 35 Chicago, Illinois |
| 6 Lisse, Netherlands | 21 Stockholm, Sweden | 36 Thimphu, Bhutan |
| 7 Christmas Island, Australia | 22 Auki, Solomon Islands | 37 Gurgaon, India |
| 8 Kuwait City, Kuwait | 23 Sana'a, Yemen | 38 Sydney, Australia |
| 9 Teotihuacan, Mexico | 24 Ala Archa Gorge, Kyrgyzstan | 39 Lisbon, Portugal |
| 10 Seljalandsfoss, Iceland | 25 Tagaytay, Philippines | 40 Seoul, South Korea |
| 11 Toronto, Canada | 26 Korean Demilitarized Zone | 41 Soweto, South Africa |
| 12 Madrid, Spain | 27 Timbuktu, Mali | 42 New York, New York. |
| 13 Antseranana, Madagascar | 28 Warsaw, Poland | 43 Tokyo, Japan |
| 14 Brisbane, Australia | 29 Austin, Texas | 44 Vava'u, Tonga |
| 15 Dublin, Ireland | 30 Tokyo, Japan | 45 Cape of Good Hope, South Africa |

46 Panama Canal, Panama	55 San Francisco, California	64 East Jerusalem, West Bank
47 Wadi Rum, Jordan	56 Taipei, Taiwan	65 Paris, France
48 Lemur Island, Madagascar	57 Vancouver, British Columbia	66 Montreal, Quebec
49 Albert Park, Auckland, New Zealand	58 Washington DC, United States.	67 Nellis Airspace, Nevada
50 Batik, Morocco	59 Rio de Janeiro, Brazil	68 Los Angeles, California
51 Amsterdam, Netherlands	60 Cologne, Germany	69 São Paulo, Brazil
52 Atlanta, Georgia	61 Singapore	70 Seattle, Washington
53 Mexico City, Mexico	62 Alhambra, California	
54 Brussels, Belgium	63 Tel Aviv, Israel	

どうでしたか？いわば、オタクがオタクダンスを世界中で踊ったというだけの動画で、実にくだらないことをやっているとも言えるわけですが、何か人を引きつけるものがあります。1つの国はほんの数秒しか映りませんが、移動や撮影に少なくとも1、2週間はかかるわけで、クリップの長さに比して膨大な時間とエネルギーが注がれていることが想像できます。

戦争や貧困による大量殺戮、飢餓、児童売春、疫病に満ち満ちている世界で、なにも呑気なことをやっているんだという批判も可能ですが、彼なりのやり方で世界を切り取って見せてくれていて、世界に関する知識があり意識が高ければ高いほど考えさせられるともいえます。そして何よりスポンサーがつくだけの魅力があるのがいいですね。

私たちが始めようとしているカンボジアでのプロジェクトも **Matt** 君のビデオのようにスポンサーがつき拡大して行くのが理想です。成功させる為には、奨学金制度そのものがしっかりできていることやカンボジアでの協力者が大切なわけですが、お金を出してもいいと思わせるほど魅力的にできるかどうか、大切なポイントだと思わされたビデオでした。

残り福に考える日本の文化

井川 好二



銹絵染付梅波文蓋物におせち¹

「まだ松の内どすよって」と女将が運んで来たのは、乾山風²の鉢に盛られたおせち。行きつけの割烹、えべっさん³残り福⁴の夜である。

「Oh、JAPAN の正月」

「吹田の慈姑⁵、丹波の黒豆、琵琶湖の諸子⁶の昆布巻き、どす」

「こういうのが、美味そうに思えるんは、歳いった証拠」

「へえ、だいぶ大人になりはった」

「あれ、チョコギ⁷がないなあ」

¹ 「自遊人」2008年3（隔月刊）p. 105

² けんざん - やき【乾山焼】元禄（1688～1704）の頃、尾形乾山が京都の鳴滝で始めた陶器。兄光琳（こうりん）が絵付に加わり、装飾性に優れた茶道具や懐石器などを製作。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

³ えびす - こう【恵比須講・夷講】商家で商売繁昌を祝福して恵比須を祭ること。親類・知人を招いて祝宴を開く。旧暦11月20日に行う地方が多いが、1月10日・1月20日・10月20日に行うところもある。中世末に始まり、江戸時代に盛行。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

⁴ 1月11日

⁵ くわい【慈▼姑】野菜として水田などで栽培するオモダカ科の多年草。青みがかった塊状の地下茎を食用にする。◇球塊の上部に芽が出ていることから「芽が出る」「めでたい」として正月料理などに使う。[明鏡国語辞典]

⁶ もろ - こ【▽諸子】ホンモロコ・タモロコ・スゴモロコ・イトモロコなど、コイ科タモロコ属とその近縁の淡水魚の総称。体は細長く、一對の口ひげをもつ。食用。◇琵琶湖特産のモロコはホンモロコのこと。現在は各地に移殖されている。[明鏡国語辞典]

⁷ ちよろぎ【▽草▽石▽蚕】シソ科の多年生草本。高さ30～60cm。葉は対生。茎は四角形で、稜（りょう）には多くの細かいとげがある。秋、紅紫色のシソに似た花をつける。地下茎の先端にできる紡錘形の塊茎は食用。中国原産。Chinese artichoke【学研新世紀ビジュアル】

ちよろぎ【<草石蚕>】淡紅紫色の花を穂状につけるシソ科の多年草。地下茎の先端につく白い巻き

「センセ、チョロギ好きでしたん？すんません、ちょっと切らしてしもて」
「かめへん、かめへん。黒豆に付きもんやから、なかったら、ちょっと寂しいだけ」



黒豆にチョロギ⁸

チョロギとは、シソ科の多年草で、地下茎を梅酢で染めて、黒豆と一緒に盛る。

若い頃は、正月だと云っても、おせち料理など何の興味もなかった。是非食べたいと思うことはなく、正月は洋風のおかずが恋しかったものだが、最近日本でむかえる正月には、おせちが欠かせないと感じるようになった。ようやく大人になって、日本の味がわかるようになってきたと云うことか。

思えば、英語を教えるようになった理由の一つに、西洋文明に対する憧れがあったはず。西洋のことをもっと知りたい気持ちや、できれば西洋と自分を同一化したいと云う思いが、外国語を学び、外国語を教えることに繋がる部分があったはず。反対に、日本やアジアのことなど、身近過ぎて、知りたくないと思っていたに違いない。

しかし、英語を使ったり教えたりすればするほど、考えさせられるのは、日本のこと、アジアのこと。あるいは、自分の文化。日本人のことが分からずに、日本人に教えることはできないと云うこともある。つまり、仕事ができる英語教師ほど、外国語、外国文化との比較の観点から、日本語、日本文化がよくわかっているとも云える。それに、その外国語である英語を使って話す内容は、日本のことが多いのである。

日本のことを如何に分かっていないかを、ひしひしと感じさせられることが多いのが、外国語や外国の文化を教えることを生業とする英語教師だと云うジレンマ。外国語教師の研修には、自国の文化を学ぶ姿勢を育てることが欠かせない。

中国江南⁹の地方都市から、大阪に留学している大学生数名のスピーチを聞く機会があった。日本語は中国の大学でしっかり学んできたのだが、初めての外国、日本へやって来て数ヶ月。ちょうどなれてきた頃だが、日本での大学生活やバイト体験で、感じることは多いと云う。

年初から、日本人、日本文化を考える良い機会となった。

「この間、中国の学生が面白いこと云うてた」
「へえ、どんなことどす？」

貝状の塊茎は食用。梅酢で赤く着色し、正月料理の黒豆にまぜる。[明鏡国語辞典]

⁸http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Stachys_affinis_dyed_red.jpg

⁹ こう - なん【江南】①川の南。②長江下流南側の地。江蘇・安徽省南部と浙江省北部を含む。広く、長江以南の地方を指すこともある。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

「バイトの面接行って、店長に『今度電話する』云われて待ってたけど、いっつもかかってけえへん」

「そうだな、『今度する』云うのは、つまり『せえへん』云うことどすなあ」

「それが外国人には曖昧で分かり辛い」

「ホンニ。日本語で、ちょっと、『一見さんお断り¹⁰』みたい」

中国の学生たちは、自国と日本の文化の違い、その日中の文化の違いから来る言葉の使い方の難しさに、戸惑うと云う。しかし、そう云う彼らも、日本文化にたいする憧れを感じ、彼らが理解する日本文化と自分を同一化させたいと願っているのだろうか？

また、その日本文化を学ぶ過程で、日本文化を鏡にして、中国文化を映し、自国の文化を、あるいは、自分たちを、客観的に理解できるようになるのだろうか？

「日本理解」の授業で習った「義理」「恩」「ウチ／ソト」などと云う、伝統的に日本文化、日本社会の特徴とされる概念が、変化してきているとは云え、21世紀の日本でも、まだ生きてると、中国の学生たちは感じている。云われてみれば、なるほどとってしまう。

「義理¹¹」とは、中国から輸入された道德だが、日本式には、「社会生活を営む上で、人として守るべき正しい筋道」(明鏡国語辞典)。「菊と刀」の中で、ルース・ベネディクトは、「自分の受けた恩恵に等しい数量だけ返せばよく、また時間的にも限られている負い目」と考え、恩と区別した。

These debts are regarded as having to be repaid with mathematical equivalence to the favor received and there are time limits. (Benedict, 1946/1974, p. 116)¹²

もともと仏教の概念であった「恩」も、中国から輸入した考え。これを独自の社会規範とした日本では、「恩」は、“Obligations passively incurred. ... on are obligations from the point of view of the passive recipient. (Benedict, 1946/1974, p. 116) さらに、

社会的地位の高い主人が、従者や従者の家族に与えた精神的、物質的な給与一切を意味した。この主従関係が続くかぎり、給与一切は、従者がいかに奉仕を積重ねても等しくなりえない従者の終生かつ子孫の負い目と観念された。したがって受恩者には無限の義務が生じ、そのあかしとして主人への無限の忠誠が必要となった。恩はこうして、日本の封建社会の主従関係を支えた。(→御恩、奉公)【ブリタニカ】

中国の学生たちは、スピーチの中で、例えば、こんな「日本体験」を語る：

- 日帰りで伊勢へ遊び行った翌日、その時のお土産を渡したら、バイト先であるコンビニの店長は、何度も、何度も「ありがとう」と云う。次の日の朝にも、「昨日はありがとう」と云ってくれた。日本人は礼儀正しいとも云えるが、こう何度も礼を云うのは、外国人で、他人である私に、「恩」を受けたくないから？それとも、「義理」？

¹⁰いち - げん【一▽見】料理屋などの客が、なじみでなく初めてであること。また、その客。「一の客」「一さんお断り」◇一度見参(げんざん)の意。【表記】「一現」は誤り。[明鏡国語辞典]

¹¹ぎ - り【義理】社会生活を営む上で、人として守るべき正しい筋道。道義上または立場上、他人に対して果たさなくてはならないつとめ。「一と人情の板ばさみ」「一を立てる(=付き合いや恩義を大切に考え、それに見合うだけの行為で応える)」「一を欠く(=当然しなくてはならないことを怠る)」「あの人には一(=報いなくてはならない恩義)がある」「一で出席する」「一にも(=お世辞にも)うまいとは言えない」「今さら相談できた一ではない(=相談できる立場ではない)」

[明鏡国語辞典]

¹² Benedict, R. (1946/1974). *The chrysanthemum and the sword: Patterns of Japanese culture*. Tokyo: Charles E. Tuttle.

- 居酒屋でバイトしている私が、お客さんの注文を聞き間違えた時、店長と女将さんが、お客さんのところへ一緒に行って、「どうも、すみません」と謝ってくれた。中国では、そんなことは絶対ない。とても嬉しかったし、店長も女将さんも優しいと思った。日本人の友達がよく使う、「ウチの店」とか、「ウチの学校」とか云う言い方が分かる気がしました。これは、私が受けた「恩」？
- 日本のアニメやマンガが好きなので、日本人の友達と話していると、盛り上がって楽しいのですが、その友達は中国人である自分が、どこまで日本人と同じ様に振る舞うことを期待しているのか、わかりません。その期待に、ちょっと不安な時もあります。これって、「義理」ですか？

こういう中国人の大学生たちは、日本の正月を、どう感じたのであろうか？

思えば、おせちの定番である慈姑もチョコログも昆布も、中国から日本に伝わってきた。その外国からの食材を、長い歴史の中で、独特のオリジナル料理に仕上げてきたのが日本の食文化。箸も稲作も漢字も仏教も、中国から「終着駅」である日本へと届けられ、オリジナルな日本文化形成の原材料になった。



京都えびす神社で、稲穂飾りの舞妓¹³さん

ACROSS/e-dream-s の招待で、正月に来日したカンボジア人のソコムは、日本をどう感じたのであろうか？日本・柬埔寨（カンボジア）の文化の違いを、どのように受け止めたのだろうか？ ちなみに、カンボジアはインド文明東進の「終着駅」とも云える。

英語が **Global Language** になればなるほど、日本人、日本文化を理解することが必要になる。英語を誰に教えるのか、英語で誰と話すのか考えれば、自明であろう。

「文化て、面白いもんどすな」
「その人にとって、蚕の繭やて、司馬遼太郎は云うてる」
「蚕の繭どすか」
「快適やし、なかったら生きられへん。それに、それを自分で作ってる面もある」
「自分では自分のこと、よう見えへんともおますなあ」
「その通り。誰かと比べてはじめてわかることもある」

¹³ まい - こ【舞子・舞▼妓】舞をまっけて宴席に興を添える少女。特に、京都・祇園のそれを指す。
[明鏡国語辞典]



白味噌碗¹⁴

「聖護院の大根¹⁵と、里芋の入った、白味噌のお碗どす」

「そらええ、暖まりそうや」

「お酒にしましょか？」

「そやなあ、日本酒のお勉強も、もっともっとせんとあかんし」

残り福の夜は更けて行くのである。「恵比寿」は、七福神の一つで、海運や漁業の神であり、商売繁昌の神とされるが、「夷」と書けば、外国人と云う意味になる。(Sunday, January 18, 2009)

¹⁴ 「クロワッサン」(October 10, 2008) p. 86.

¹⁵ しょうごいん - だいこん【聖護院大根】ダイコンの一品種。京都聖護院で作り出されたという。根は丸く軟らかくて、煮物に適する。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

新しい私へ：CamTESOL カンファレンス・ツアー一進捗状況報告

塚 本 美 紀

一昨年から小笠原礼法の教室に通っている。立ち居振る舞いや日本の伝統的な行事や日常生活での作法を習う教室だ。きっかけは、行儀作法が習いたかったというよりも、着物を着る機会を増やして、着物を着ることに慣れたかったからだ。慣れないことをしようとするのは億劫だ。事前にいろいろな道具を揃えることを考えると、着物を着るのを躊躇してしまう。その上、「この紐はどうするんだっけ？」「あ、何か変。もう一回やり直し！」などとやっていると、やっと着終えた頃にはもうすっかり疲れ果ててしまう。そんな状況から抜け出すために、月に2回のお稽古に通うようにし、何とか以前の半分の時間で着物が着られるようになった。毎度のことなので、準備をするのも何のことはない。小さな変化ではあるが、着物を着るとなると前日からあたふたしていた以前の私とは違う私になった。

今年も CamTESOL に参加する。二度目の参加である。去年は、こんな大会に私が出てもいいのだろうか、準備は間に合うのだろうか、どんな人が聞きに来てくれるのだろうか、うまくできなかったらどうしようなどと、いろんな心配を抱えての参加だった。二度目の今回は、聴衆の感じも少しはわかる、会場の温かい雰囲気も知っている、そして何よりも助けてくれる仲間がいることがわかっている。不安で一杯だった去年とは違い、少しは落ち着いて臨めそうな気がする。たった一回の参加で「慣れる」とまではいかないが、それでも一回の経験は、何もなかったときとは随分違うことを感じている。

その去年の CamTESOL で偶然知り合ったソコムさんが、今年の ACROSS 冬合宿に参加してくれた。カンボジアについての書籍が少ない中、彼女のカンボジアの英語教育についての発表は学ぶことが多かった。e-dream-s の理事会にも出席し、カンボジアでの奨学金プロジェクトについてのプロジェクト・チームへの参加を表明してくれた。昨年 Site visit で訪れた学校でたまたま立ち話をした彼女と、このような繋がりができるとは想像もしていなかった。

先日、ソコムさんの友人の S さんからメールが届いた。日本政府の奨学金を得ることができ、7月から一橋大学に留学することが決まったとのことだった。S さんはソコムさんと同じ学校に勤める英語の先生で、去年の夏、カンボジアを訪問した際、私たちを案内してくれた人だ。何のつてもなかったカンボジアで、少しずつ繋がりができつつある。

カンボジアでの奨学金プロジェクトを実施するには、現地での協力者が必要である。どのような支援の形が現地で必要とされているのか、そして e-dream-s にとってふさわしいのはどのような形か、現地の様子を把握してきたい。今回の CamTESOL カンファレンス・ツアーでは、発表と同時に、奨学金プロジェクトの準備についてもしっかりとやっていきたいと思う。

「e-dream-s でアジア学校教育支援を！」などと言ってみたところで、いったい何から始めていいのやらさっぱりわからなかったのが2年前。わからないことだらけで、「私たちはいったい何をやりたいのだろうか？」と立ち止まることも多かった。けれども、動き始めてみるといろんなものが見えてきた。面白い人たちに出会い、いろんな繋がりができてきた。e-dream-s にふさわしい支援の形も少しずつ見えてきた。一緒にやっていく人も、だんだん見えてきた。入り口で戸惑っていた頃とは大きな違いだ。雲をつかむようなことで、大変そうに思っていたことが、実態が見えてきたことによって、自分の手に届くような気がしてきた今、実際にやってみることの大切さを実感している。それも、一度ではなく何度もやっているうちに、こちらも向こうも互いに慣れて、見えてくるもの、生まれてくるものがあるのだと思う。CamTESOL カンファレンス・ツアーまであと少し。カンボジアへの再訪で、カンボジアに、カンファレンスに、教育支援事業に、また少し慣れて、新しい私になりたいと思う。

My Experience in Japan

Sokhom Leang

I accidentally met Miki Tsukamoto and Dr. Koji Igawa at the Australian Centre for Education (ACE) during their site visit tour just before CamTESOL 2008. This chance meeting culminated in my first-ever overseas trip by myself to Japan in January 2009, to attend the 2009 ACROSS Winter Seminar.

This was a big turning point in my life to have such a great opportunity, which is dreamt of by my many other colleagues, to be able to exchange my learning and teaching English experiences in Cambodia with Japanese teachers of English from different parts of Japan.



I arrived in Osaka on January 2. I found myself very stimulated by every single thing in this modern and developed city. Travelling on my first train, seeing fast-walking people, beautiful tall modern buildings, winter flowers, and meeting friendly and helpful Japanese friends impressed me a lot! After my tour around Osaka, led by Mr. Toshiyuki Fujisawa, vice president of ACROSS, I then had an opportunity to meet my Cambodian friends in Kobe and spend time with them, which was just like a dream. In

addition, my stay in Kyoto during the seminar from January 4th to 6th was a priceless and unforgettable overseas academic experience.

I was warmly welcomed by Ms. Yoshiko Kawano, president of ACROSS, at the opening ceremony on January 4th. I could hardly find the words to express myself at my first welcome speech, as I was just too excited. Moreover, I was more than happy to be asked to join the Cambodia project, working together with Ms. Fusayo Nakagawa and Ms. Miki Tsukamoto. Although time flew by during the three-day seminar, I learnt quite a lot of new things through presentations, lectures, and other types of training. I was so surprised to see how hard Japanese teachers of English focus on English pronunciation and help each other to find better ways of teaching English. Even though I was exhausted from the long trip all the way from Cambodia, and the chilly winter weather, through the special attention from everyone and my own determination, I was able to get through the whole seminar experience with enjoyment and satisfaction.



Despite the rigorous academic aspect of the seminar, I was amazed by Miki San's skill of dressing me in a Kimono and how complicated it was to wear this traditional dress. Though it took a long time to dress, I was very happy and couldn't believe how beautiful I was in a Kimono. Furthermore, I enjoyed myself a lot at the party and at my first special time at a Karaoke, Supper Jankara.

Frankly speaking, it is no exaggeration to say that my success at the seminar came from everyone's assistance, friendliness and kind cooperation. The support I obtained from my best care-takers, Mr. Fujisawa and Miki San, played an enormous part in the success of my stay in Japan. I found my time in Japan to be very exciting and memorable, especially my short trips with Mr. Fujisawa to different parts of the country such as Osaka, Kyoto, and Kobe.

All in all, attending the 2009 ACROSS Winter Seminar provided me with not only the aforementioned experiences, but also a deeper understanding of Japanese society. This will help me to prepare for a great social learning experience in Japan upon my return in April 2009. I hope to have a productive academic life in my Masters program at Nagoya University through my Monbukagakusho scholarship (MEXT), and to get involved with further ACROSS activities in terms of educational development.

トロバエク・プレイ、サク？

仙崎裕右



(トロバエク・プレイ¹⁶の花。日本の桜に似ている 2008年2月撮影)

CamTESOL2009まで2か月を切った。今年も参加させていただくことになり、勤務先への根回しやビザ取得など、少しずつ準備を始めているところである。肝腎の発表の準備の方はまだほとんど手が付いていないのが現状ではあるが・・・。

今回のアクロスの冬合宿で、カンボジアから素敵なお客、Sokhom Leangさんが参加してくれた。他の先生方の原稿でも何度も取り上げられているので、彼女の紹介の必要はなかろうが、昨年のCamTESOL2008ツアーで、現地で最初に声をかけた人物であることは特に記しておきたい。プノンペンに到着し、バンで市内へ。すでにCamTESOL主催のSite Visitは始まっている。私たちは3つにグループを分けた。高等教育のサイトビジットに途中から合流する組、初等教育のサイトビジットに途中で合流する組、そして、いったんホテルにチェックインし、その後、サイトビジットに参加する組である。塚本先生と私は最後の組に入り、ヒマワリホテルに入った。荷物を置き、語学学校、ACEへ。まだ中川先生、道面先生が参加されている初等教育のグループは到着していない。待ち時間の間、塚本先生はそこにいた先生にProfessional Development Needsについてインタビューを始めた。その記念すべき第一号の方がソコムだったのだ。

¹⁶ 和名：オオバナサルスベリ。東南アジアではよく街路樹に用いられるらしい。「トロバエク」は「グアバ」のことらしい。ちなみに、タガログ語では「バナバ」といい、葉をお茶にすると健康によく、生活習慣病の予防にも良いらしい。（「らしい」ばっかですみません）

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%83%8A%E3%83%90>



(ACEで説明するソコム。2008年2月撮影。右は中川先生)

この数年、e-dream-sの活動に加わらせていただきながらいつも感じていることの1つに、この集団の「運の強さ」がある。たまたま話しかけたソコムから他の実行委員のメンバーや、Takmao村まであれよあれよとつながってしまった。塚本先生はe-dream-s通信の中で「わらしべ長者」と評しておられる¹⁷。もちろん、ただ運があっただけではなく、根気よくマメに連絡を取り続けた塚本先生の情熱による功績なのだが、やはり、何かを見つけ出す「嗅覚」が優れているのであろう。

さて、そのソコム。その積極性、行動力に感嘆させられた3日間であった。各級の訓練や発表を見たり、夜も会話に参加したり、パーティでは着物姿まで披露したり、と、どんどんこちらに入ってくる。終わるころにはゲストというより、本当に仲間になれたと感じさせてくれた。また、これから始まるSEE C (奨学金)の準備委員会にも参加してくれることになった。



(和装のソコム。左は塚本先生、右は稲川先生)

せっかくの機会と、ソコムに以前からのささやかな疑問をぶつけてみた。この原稿のタイトル下に掲載した写真(2008年3月号にも同じものを掲載した)の花の名前である。去年現地で、桜に似ているが、なんという名前の花だろう? とみんなで首をかしげていた花である。シエムリアップに向かうべく、早朝のプノンペン空港に急ぐタクシーで聞いても結局わからなかった。

「トロバエク・プレイ」という名前であることが確認され、一安心。約1か月先には再びこの花と相對することができる。トロバエク・プレイの花が、日本のように「サクラサク」になってくれるだろうか。「カンボジアの土」、もとい、「カンボジアの父」というわけにもいかないが、何かできればいいなと思っている。

¹⁷ e-dream-s 通信 2008年9月号参照

メキシコでの異文化

理事 山田昌子

冬休みを利用して、12月25日から1月5日まで、私は女性の友人2名（日本と韓国出身のサンフランシスコ州立大学の院生）とメキシコを訪れた。

<右写真は、オアハカ（Oaxaca）の街にて>

メキシコシティ（Mexico City）でメトロ（地下鉄）に乗っていると、突然大きなポピュラーミュージックが聞こえて来た。「凄い騒音、何事？」と辺りを見渡すと、CDプレイヤーを持った男性が、音楽CDを売り歩いている様子。一緒にいた友人と「いくらかな」とよ〜く聞いてみると14ペソ（US\$1程）/個（安い！）。その音楽は"Stand by Me"だったり、ビートルズだったり、最近のヘビメタだったり。その他接着剤売りにもあった（5ペソ/個）。メトロではこんな物売りは珍しいことではないらしく、何人かの乗客が何食わぬ顔。接着剤を買う乗客もいた。これまで様々な国々を訪れたが、こんな体験は初めて。



これまで訪れた国とは異なる体験はこればかりではない。極めつけは、ほとんど英語が通じない！ レストランやお店でも、英語の数字くらいは知っているだろうと思ったが、その期待は大きく外れた。しかたなく紙を探して書き、あとは笑顔とジェスチャーで対応する。空港のSecurity Checkのofficersですら英語が出来ない。友人にトラブルが発生した時、近くにいたアメリカ生まれの12歳のメキシコ人少年が通訳をする始末。英語は第2言語とはほど遠い。



最初の2日間案内をしてくれたメキシコ人の友人C氏（現在、サンフランシスコ大学で研究中）によると、多くのメキシコ人はこれまでのアメリカとの苦い歴史¹⁸から、アメリカが大嫌い。だからアメリカの言語、英語を話そうとはしない。アメリカで働くのは、経済のため仕方なく。だからクエルナバカ（Cuernavaca; 左写真は街の中心街）で見た「移民」の写真展では、アメリカで英語を話そうとしないメキシコ人の写真が多くあった。

尤も、今はアメリカの経済がひどいため、アメリカから引き上げているメキシコ人も少なくないようだ。決してメキシコの経済がいいわけではないが、一部のnetworkingを手がけているメキシコ企業が多く収入を得ていることが影響しているようである。

彼の話は続く。彼が街で英語を話そうとするなら「愛国心を失ったメキシコ人」というレッテルを貼られかねないという。彼の経験からの言葉だと容易に想像できる。クエルナバカで案内してもらったアメリカ人女性にその話をすると、彼女は否定も肯定もしなかったが、彼女の様子から私はある意味で真実であることを読み取った。メキシコ政府の政策のせい、英語は小中学校・高校で教

¹⁸ C氏によると、もともとメキシコの土地だったカリフォルニアやテキサスなどの州をアメリカが巧妙に奪い取った（安く購入）し、何かとアメリカに都合がよいようにされてきた歴史があるという。

えているものの、時間数も少なく、それ程多くのことは学べない。教育で英語が重視されないため、メキシコの最高学府でPhDを取ったC氏ですら、常に「僕の英語は下手だから・・・」と言う。

彼の案内で、メキシコシティや郊外のテオティワカン (Teotihuacan) を訪れた。車の中のラジオからラテン音楽が聞こえてきた。明るくハッピーな音楽ばかり、踊り出したくなった。当然のことながら、キューバの音楽も、アルゼンチンの音楽も、ガテマラの音楽も、スペイン語。C氏が運転をしながら歌っている。音楽は世界のコミュニケーション手段のひとつだけれど、スペイン語はメキシコ以南 (ブラジル以外) の共通の言語。「スペイン語の音楽を聞くと、ラテンはひとつなんだと感じるし、多くのラティーノがそう思っている」とC氏は言う。スペイン語の存在、これもまた英語が不必要な理由のひとつ？

<写真は、Teotihuacanにて：C氏と>



アメリカには多くのラティーノがいるし、実際私はESLのクラスでも多くのラテン系の学生に出会った。彼らはいつも陽気で、アメリカでの暮らしを楽しんでいるように思えた。が、メキシコに足



を下ろして初めて、アメリカにいる時には感じなかった、英語やスペイン語に対する彼らの感覚を多少なりとも感じる事ができたように思う。尤もC氏の言い分がすべてだとは思わないが、ひとつの要因ではあると思う。その土地でしか味わえない感覚、それを知るために私は旅をしているし、だから私は旅が好きだし、ますます旅をしたいのだとあらためて実感した。<写真は、Monte Albanを案内してくれたB&Bのご主人とその通訳をしてくれた21歳の高校生と>

編集後記：1月4日京都で行なわれた理事会でカンボジアからいらしたソコムさんとお会いして、カンボジア・プロジェクトがさらに身近に感じられた。比較的新しい会員の方の中にはこのカンボジア・プロジェクトはどうして始まったのだろう？と思われる方もいらっしゃるかもしれません。私たちが迷いながら立ち止まりながらも、少しずつ前に歩み続け、今に至っている様子が塚本理事の進捗状況報告に書かれている。現地に行かれる方は限られているが、皆で気持ちはひとつにして進んでいきたい。2009年もe-dream-s通信をよろしく願います。(岡田)